黒岩菊郎先生のご逝去を悼んで*

大 友 栄 松**

林業統計研究会の創設ならびに発展にご尽力くださった敬愛する黒岩先生が亡くなられた。逝去されたのは平成2年菊花の薫る10月24日正午頃の由である。葬儀、告別式は同月27日に行なわれたが、当日は故人を偲ばせる秋晴れの穏やかな温かい日であり、多数の先輩、同輩、後輩、教え子、ご親族の方々などに見送られ、溢れんばかりの菊花に包まれてとわの旅路につかれた。このようなことは、黒岩先生のお人柄や生前の言動の然らしめるものであることを痛感させられた。

黒岩先生は昭和49年に東京農工大学を退職されてからは、あっさりと林学研究から離れ、テニスや彫刻などの趣味に専念されたので、本学会員の中には存じ上げない方も多いと思うので先生の思い出を特に林業統計研究会とも絡ませて述べることのお許しを乞うしだいである。

先生は、明治43年7月に、巖窟王やああ無情などの名翻訳で有名な万朝報社主の黒岩涙香氏の4男として生まれ、麻布中学、旧制松本高校を経て、昭和10年東大林学科を卒業し、同年9月東京高農の先生となり、同校が東京農工大学となり昭和49年定年退職と同時に名誉教授となられた。

先生はきわめてあっさりとした明るくさっぱりした人柄で、江戸っ子気質のよいところを備えられていたように見受けられた。同期生の方も彼は人情味があり、人の面倒見がよく、さっぱりした人だといっておられ、また古い教え子は先生は天衣無縫で親近感が強く、率直ではのぼのとした感を抱かせられたとも話しておられた。東大時代は野球の捕手で6大学のリーグ戦に出て新聞に鼠のように活躍すると評された由である。

先生は退職時に「駒場から」という小冊子を書かれているが、この中に先生の面目が躍如たるものがある。文章がなかなか上手でさすが涙香先生のご令息たるを感じさせられるが、教育に対する熱心さに驚かされる。新入生の顔写真を見、同時にその姓名を新学期の始めの1、2週間にすっかり記憶するよう努力したと述べられているが、私などは到底できそうもないことである。この本の中で自分の器用さを自負されているが、まさにそのとおりで、特に樹木の肥大成長の研究のために鏡生長計を考案して研究を進められ、また調律の器材を作り、こわれたピアノを調律したなど色々とかかかれているがその器用さにはほとほと感服するのみである。またスポーツマンとしても野球はもちろんピンポン、テニスにも長じ、退職後もよく農工大にこられてテニスに興ぜられていた。思い切りがよいといおうか、転換が早いといおうか、立場や境遇が変わればすぐそれに順応される方で、農工大時代は研究と教育に専念されたが、退職と同時にご自身の蔵書いっ

* Eishoh OHTOMO: A memory of Prof. Kikuro KUROIWA

** 東京国際大学、Tokyo International Univ.

Jpn. J. For. Plann. 16 '91

さい林学書はもちろん涙香全集などすべて農工大図書館に寄贈され、(林学科ではこれを核として募金をし、黒岩文庫として研究教育に役立てている)先生は林学からきれいさっぱりと身を引いた。林学の研究は後輩諸君に頼むぞと、ただしその便は図るよとのご意志であったようである。そしてご自身はもっぱら彫刻特に仏像のそれに熱中されていて、私も展覧会でたびたび拝見したが、それは実に緻密な素晴らしいものであった。

先生と林業統計研究会との係りあいは昭和40年の会の創設以来であるが、それ以前、多分昭和29年頃かと思うが、林野庁では民有林の森林調査がうまくゆかず(縄延び率の問題など)、そこで統計数理研究所に相談し、同所と林業試験場とでともに研究しようということとなり、山梨県の現地森林で共同調査が行なわれたのがきっかけとなり、月に1度でも森林の統計関係に関心のある研究者が集まってお互いの知識を交換しあうことにしたらという話が持ち上がり、昭和30年代の前半頃からと思うが、その頃からほぼ月1回統計数理研究所に同好者が集まり会合を持った。その中の最年長者が黒岩先生で、この会合はきわめてうまくゆき、ついに林業統計研究会の発足につながった。その際黒岩先生に会長就任の要請があったが、先生はお断わりになり、林知己夫氏が会長になり、先生は確か副会長になられたように記憶している。昭和43年には先生が編者になり、「新しい林業統計」が刊行され、林業統計研究が隆盛をきわめた。またこの頃数年文部省の科研費がとれ、先生や林氏を中心として参加者全員和気藹々として各地方の森林の調査研究をしたものだった。今にして思えば実に楽しい良き時代で、この良き時代をともにした先生を失い、まことに断腸の思いである。

さて先般遺された奥様より林業統計研究会に林業統計研究の発展のためにと100万円のご寄付があった由、おそらくこれを基金として、黒岩賞のようなものを設けられることと思うが、生前よりご逝去後ご遺族をとらうしてまでこの会の発展に尽くされたことに対してなんとお礼を申し上げて感謝したら良いか言葉の選びようもないくらいである。

黒岩先生本当に有難うございます。なにとぞ馥郁たる菊の花の香りに包まれて安らかにとわの眠りに就かれんことをお祈り申し上げます。

合掌。